

富士地区分科会

2月27日開催

## 富士山を背負う富士市の工場夜景 昼とは異なる夜の顔 夜景を地域創生に生かせ 機運盛り上げへ協議会設置や全国サミット誘致

### サンフロント21懇話会 第20回 富士地区分科会

静岡新聞 SBS



「サンフロント21懇話会」（代表幹事・岡野光喜スルガ銀行社長）は2月27日、第20回富士地区分科会を富士市のホテルグランド富士で開いた。約140人が参加し、富士市が目指す産業観光の新たな柱として注目される「工場夜景」を生かした地域づくりの可能性を探った。

主催者を代表して北村敏廣静岡新聞社代表取締役専務は「富士山を背負う富士市の工場夜景は産業観光の可能性を十分に感じさせてくれる」とあいさつし、開催地を代表して富士市の小長井義正市長は「全国工場夜景サミットの7番目の都市になる。市制施行50周年の平成28年度にサミットを誘致したい」と意気込みを示した。

基調講演の講師は世界的な照明デザイナーの石井幹子氏。「光のまちづくり」と題して国内外で取り組んできた都市景観照明（ライトアップ）の事例を紹介した上で、「光でいかにその場所の個性と魅力を抽出するかが肝心。このまちには大きなポテンシャルがある」と期待感を示した。

「夜景による地域創生」をテーマにしたパネル討論には石井氏、小長井市長、県地域づくりアドバイザーの花井孝氏、富士工場夜景倶楽部会長の鷲見隆秀氏の4人が登壇し、工場夜景を生かした産業観光や地域振興の可能性と課題について意見を交わした。

## 主催者代表あいさつ



静岡新聞社代表取締役専務

北村 敏 廣

富士市を訪れるたびに雄大な富士山、優美な姿に圧倒されます。同時に視界に入る多くの煙突群からは産業のまちとしての活力が伝わってきます。これを富士市の昼の顔とすれば、夜の顔は煙突を含めた工場群の夜景です。富士山を背負う工場夜景は産業観光の可能性を十分に感じさせてくれます。富士市は製紙のまち、ものづくりのまちですが、来年度から熱電供給事業が始まります。エネルギーを生み出す地域にふさわしいまちづくりが今求められています。

本日は世界的な照明デザイナー・石井幹子先生を基調講演の講師にお招きしました。先生の講演を通じて人づくり、産業や活力、癒しをもたらすライトアップをはじめとする光やあかりの力を知っていただき、まちづくりの切り札として認識していただければと願っております。

サンフロント21懇話会は東部地区の活性化という大きな目標を掲げ、皆さまと共に歩み続けてまいりました。活動は21年目を迎えました。あらためて会員の方々の日ごろのご支援、ご協力に心から感謝申し上げます。

## 開催地・懇話会代表あいさつ

サンフロント21懇話会富士地区分科会を開催していただき誠にありがとうございます。またタイムリーにまちづくりに関すること、特に県東部地域の活性化にかかわる様々なご提言、ご提案をいただき、心より感謝申し上げます。

富士市は昨年10月、全国工場夜景サミットの7番目の都市になることが決まりました。ちょうど平成28年が市制施行50周年という節目の年に当たることから全国大会の誘致に手を挙げさせていただきました。きょうのテーマは工場夜景ということで、おおいに応援していただけるシンポジウムになるのではないかと期待しております。

先ほど石井幹子先生の作品集、写真を見せていただき、照明によって新しいことが発見されるという照明の力や夜景が生み出す可能性に触れることができました。貴重なお話がいただけるものと楽しみにしています。その後のパネル討論には私も参加させていただき、工場夜景による地域創生について大いに議論を深め、皆さまにも可能性や魅力を知っていただければ幸いです。



富士市長

小長井 義 正

## 基調講演

# 「光のまちづくり」

講師：照明デザイナー

石井 幹子氏



ライトアップは昼間の景色を  
最小限の光で変える

私たちが住む地球は半分が昼間で半分が夜です。ともすれば一日24時間のうち昼間の占める割合の方が大きいと思いがちですが、昼と夜はちょうど同じだけの時間があります。そして国際化です。24時間地球が活動している時代となり、今、夜の時間帯が見直されています。夜の時間帯をいかに上手に使うか、いかに夜の景観を良くするかということに光が大変重要な役割を果たしています。きょうは皆さま方に私がこれまで行いました照明の作品をご説明しながらお話を進めてまいります。夜景に合うプロジェクターをご用意いただきましたので、いろいろな夜景を堪能していただければと思います。

私は照明デザインに照明器具のデザインから入り、やがて建築照明を手掛けるようになり、都市空間の照明に軸足を移すようになりました。しかし日本では都市景観照明の大事さがなかなか認められませんでした。最初に都市景観照明、ライトアップを取り上げてくれたのは横浜市です。大正時代に建てられた横浜開港記念館をわずか5台の照明器具でライトアップし、横浜税関の建物もかつては港のランドマークだったクイーンの塔を生かすミニマムな照明をしました。これらを10日間の横浜ライトアップフェスティバルとして行ったところ大変好評でした。そして大勢の方から「10日間ではもったいない。常設化すべきだ」という声が市に寄せられ、開港記念館の常設化をきっかけに年々増えていき、今では市内で53カ所がライトアップされています。昼間の景色を夜、光でそれも最小限の光で変えるということが大勢の方に受け入れられるようになりました。

横浜の話聞いて古都奈良市が動きました。奈良市も昼間は大勢の観光客でにぎわいますが、夜は潮が引いたように人がいなくなってしまいます。

なんとかわいい季節の7～9月だけでも奈良公園内の歴史的な建造物を照明することになり、大仏殿や興福寺の五重塔のライトアップが実現しました。

街中を巡って歩ける夜景で宿泊呼び込む

ライトアップは光の造形です。夜の闇のキャンバスに光を用いて絵を描いていくという仕事です。何でもかんでも光を当てるのではなく、程よい暗さや明るさ、その中間とバリエーションを持って作っていくのが光のデザインです。周辺の景観づくりも大事で、ポツンポツンと良いライトアップがあってもそこを見て回る動線上の照明も重要な要素となります。

北海道函館市は竹下元総理が実施した「ふるさと創生」の1億円を夜景整備に充てました。函館は美しい夜景で知られたまちです。特に市街地の真南に位置する函館山からの夜景は天然のもので真っ暗な海があり光の岬を形作っています。さらに家々は日当たりを考えて必ず南を向いて建てますから、光の量が多いのです。

函館山にケーブルカーで登って「まあきれいなね」で帰ってしまうのではなく、街中を巡って歩ける夜景を提案しました。実際にまちを歩いて探すと、明治、大正、昭和と年代が異なり、西洋風の洋館にも英国風、米国風、ロシア風、また中国風といろんな面白い建物があることに気がきました。それらをピックアップしライトアップしていきました。これは明治時代のレンガ造りの郵便局で、中は土産物店さんやレストランなどになっているわけですが、ライトアップすることによって旅行者が巡って歩くようになり、新たな店も生まれます。よくいわれることですが、昼間来て夕方ぐらいまで帰ってしまう通過型の観光に比べ、夜景を見るには一泊しなければなりません。食事にお酒、購入するお土産の量などが増え、宿泊型の観光は通過型に比べ約11倍の経済的な波及効果があるそうです。

函館の例を見て長崎市から依頼がありました。長崎には江戸時代からの大浦天主堂や石橋の眼鏡橋などいいものがたくさん残っています。昼間の景色はグチャグチャしていますが、夜はそれぞれの建造物にさまざまなライトアップを施してまち全体が博物館のようにならないかと考えました。それこそ点のようにちょこちょこっとではあります、それでも歴史の重み、歴史の厚みが光で表現できました。

1980年代後半になると景観照明に関心が払われるようになりました。これは横浜ベイブリッジですが、白い橋を白く照明するだけでなく、デザイン性を盛り込みたいと考えて1時間に1回だけ上部をブルーに染めることにしました。かつて「ブルー・ライト・ヨコハマ」という歌がヒットしましたが、横浜はこのブルーが似合うまちです。10分だけ青い色になってまた元の白い色に戻ります。ゆっくりと潮が満ちてきてまた返す。そんな感じのライトアップを提案し、実現しました。ブルーの間にプロポーズすると恋が実るということで、若いカップルの人気となり、車の中でブルーになるのを待つという現象が起きました。今は橋の持ち主の首都高速道路公団が「1時間に1回ではかわいそう、せめて2回に」と粋な計らいをして毎正時と30分にブルーになっています。

### 東京タワーは季節感取り入れ「平成の光」に

東京タワーの点灯は平成元年です。日本電波塔から依頼されたのはその3年前で、人気低下に悩んでいました。他にはない、海外にもないライトアップをしたいと考えた結果、季節を表現することにしました。日本人はもともと季節に敏感です。そこで夏の涼しい光と冬の暖かい光と2つの意匠を用意しました。「昼より夜が美しい。夜の東京タワーはきれいだ」と言われたい。そんな野望もありました。ところがタワーは設備面での制約が多く、地震や台風のほか東京湾に近いから塩害への対応、電球の交換対策と苦労しました。点灯の時期が昭和から平成に変わった時で、「平成の光」ともいわれ、東京タワー現象も起きました。人が集まれば屋台などが出てにぎわいますし、周辺のマンションやオフィスは「東京タワーの夜景が見える」を売りにします。たくさんのチラシに東京タワーの夜景が載るようになりました。

名古屋では名港大橋を手掛けました。3つの橋で構成され、名港トリトンと呼ばれています。長大橋・明石海峡大橋の照明デザインもさせていただきました。全長が4<sup>km</sup>、支柱の高さが300<sup>m</sup>という大きなもので、その下の海はタイヤタコなど

の国内屈指の好漁場です。ライトアップにはいろんな条件が付きましました。まず海面の明るさは満月以下。満月の光は0.1ルクスといわれていますが、それ以下にするとといっても暗い橋のままだったらライトアップする必要がなくなります。下は暗く、横方向にスーッと伸びる光の設計を採用しました。この橋は阪神淡路大震災の復興のシンボルとなり、毎正時と30分に虹のような色の光を演出しています。

### ライトアップに自然エネルギーを導入

東京港のお台場と芝浦を結ぶレインボーブリッジは自然エネルギーを使ったライトアップをしています。経験的に石油危機とか中東に異変があった時、照明は消せ消せといわれます。ですから一部であっても自然エネルギーの導入をお願いしています。レインボーブリッジの場合は主塔の上に太陽光発電のパネルを敷き、ケーブルイルミネーションの約4割を賄っています。白色がベースですが、週末には東京都のシティカラー・緑が付きまします。手前に屋形船と提灯の明かり、遠景に東京タワーという都市の歴史を映す光景は大変いいデザインで、私はこれが夜景の一つの魅力ではないかと思えます。「名称がレインボーブリッジなのになんで白い橋なの」に注釈を加えますと、竣工間際に公募で名称が決まったからです。レインボーブリッジの名称が最初から分かっていたら、もっと違うデザインができた残念でなりません。ただミレニアムなど大きなイベントではカラーフィルターを付けてレインボー色を演出しています。この頃では大変いいフィルターができ、きれいな色が出るようになりました。

北九州市の門司では海水を使った噴水をデザインしました。戦前、大陸と行き来する船の発着場だった静水面の浮棧橋を利用し、空洞の浮棧橋の中にポンプを入れて噴水にしたのです。光はすぐ近くにある建築家・黒川紀章さん設計の超高層マンションから投げ掛けています。立体的でダイナミックな夜景になりました。界限にはレトロな建物も集めてあり、博多と門司港を結ぶナイトライトアップ電車が運行されています。

### 熱海の海岸を照明、 旅館・ホテルから引っ張り出す

次はごくお近くの例で、熱海市のサンビーチです。今は復活しつつあると聞いていますが、当時の熱海は客足が遠のき、さびれてきていました。市からの依頼を受け、熱海のまちをつぶさに拝見

させていただいたのですが、あの有名な熱海の海岸は夜になると真っ暗で何も見えないし、怖い場所になっていました。熱海は温泉観光地ですから、夜になっても観光客や市民が散歩したり、波打ち際で佇んだりすることができる場所にしたい。防波堤に光を埋め込み、薄いブルーで照明しています。宿泊客が旅館やホテルの中にとどまっているのではまちは活性化しませんので、何とかまちを歩いてもらいたい、散歩してもらいたいという思いでこういう仕掛けを作りました。

東京浅草の浅草寺。ここも長い間、真っ暗でした。あるとき地元のおかみさん会のメンバーが事務所を訪れ、浅草寺の許可も得ているのでライトアップをしてほしいという依頼を受けました。「でも今はお金がありません。どのくらい必要かわかれば寄付を集めますから先生しばらく待ってください」ということになりました。2年半ぐらい待ちました。五重塔をはじめ建物のライトアップはできるだけどこから照らしているのか分からない工夫をし、日本の建築物の特徴である朱塗りの色をきれいに見せることを心掛け、ランニングコストも抑えるようにしました。これによって夜の活気が生まれ、まちが活性化しました。その功が認められて今は台東区が電気代を負担してくれています。

### 世界遺産の制約克服し、 集落を満月の明かりのように照らす

奥飛騨の白川郷合掌造りのライトアップも手掛けました。当時の村長さんが「東海北陸自動車道が開通すると白川インターチェンジができ、和倉温泉まで車で40分で行けるようになる。そうすると合掌造りの家々が営んでいる民宿が大打撃を受ける。夜ここで見せるものが欲しい。それは照明です」と駆け込んできました。12月初めに現地に入り、合掌造りの民家に宿泊しました。その晩から再び雪が降り出し、朝になったら1.5メートルぐらい積もっていました。ライトアップはその言葉が示すように下から上に向かって光を当てます。一晩に雪が1メートルも積もってしまうのでは役に立ちません。最小限のポールを立てさせてもらう案は文化庁から「世界文化遺産の地に新規のポールなんて認められない」といわれ、雪国の特色である軒高の軒下から交互に照らし合うアイデアも電力会社から「1世帯1受電が規則。電気事業法違反になります」と退けられてしまいました。

どうしたかと言いますと、全村を満月の明かりのように照らす。村がすっぽり見える峠の展望台の足元に灯光器を入れ、向かい側の山の中腹に何

台か灯光器を置かせていただきました。そこには昼間見ても分からないように合掌造りの屋根を掛けました。明かりもコントロールして満月の光のようにしました。ライトダウンですね、アップじゃなくて。冬の雪の間しかやっていませんが、写真を撮る方など来遊客が増え、大変な人気になっています。

会場全体の照明を担当した「愛・地球博」（愛知県で開催）ではいろいろと挑戦しました。会場には高い塔がなく、近くにも見晴らし台がないので全景を楽しめないことに気付き、ヘリコプター中継を意識したヘリ目線の照明を試みました。パビリオンの屋根にも照明を付け、空から見て会場全体が引き立つようにと考えました。木製の遊歩道には新しい光源をたくさん使っています。太陽光発電を仕込んでゆらゆらと揺れるエキスポ光花という小さな花を作りました。実は抜いて持ち去った方が多かったので、なるべく自然エネルギーを使う工夫を重ねています。

### 同業者も気付かなかった照明器具の配置

倉敷です。江戸期の建物がちゃんと残っていて真っ白の漆喰で塗られたなまこ壁の蔵造りが特徴です。倉敷川沿いの美観地区は大変厳しい規制を設けています。伝統的建築物審議会というような名称の委員会があって多数決ではなく、委員12人中1人でも反対がいたら何もできない仕組みになっていました。ここでも夜は暗く、観光業者から「夜見るところがないからホテルや旅館は素通りされて隣町に行ってしまう」と相談があり、「一度倉敷で講演会を開いてほしい」と頼まれました。

地元の人が市に掛け合い、審議会も通りました。ところが厳しい条件が付いていました。まず昼間の景色を変えてはいけない。「照明器具が一つでも見えたらそれは昼間の景色を変えたとみなす」というんです。さらに道路を掘り返してはいけない、堀の水も抜いてはいけない。「照明器具は徹底的に隠せ、道路を掘り起こす配線工事はだめ、お堀の中の配線工事も認めません」ということです。試行錯誤を重ね、既存の街灯の傘の中に小さな灯光器を2つ入れ、横方向に光を延ばす新開発のレンズを付けました。1階の軒下には出始めだったLEDを使って、それこそ軒裏に隠すようにして照明をしました。フランスから来た同業の照明デザイナーに「どこから照らしているんだろう。照明器具がないじゃない」と言われた時には、内心「やった」と思いました。倉敷の夜景は煌々として明るいものではありません。文学的に形容すると「光の霧をまとったような夜景」。優しい、

柔らかい光の街づくりです。大原美術館長の高階先生、大原家ご当主の大原さんから「よかったよ」とおっしゃっていただいて私は胸をなでおろした次第です。

倉敷でもう一つ試みたことがあります。街中では建物の所有者やお店の方はほとんど寝泊まりしていません。夜は無人ですから2階部分が真っ暗です。2階の窓の中からほのかな明かりが見えるようにしたいということで、特別な行燈をデザインし、部屋に入れさせてもらいました。不在時の地震、火事が心配という声がありましたので、30度傾いたら電気が切れる仕組みにしてあります。千本桜で有名な長野県の上田城址です。来年の大河ドラマ「真田丸」に寄せる期待で地元は熱く燃えています。ここには100台近い照明器具を入れ、春は桜、秋はケヤキをライトアップしています。年間契約をしていて、桜の開花時期の連絡が入ると、スタッフが2週間前には現地に入り、桜の木の状態を見ながら重点的にやる木、休ませる木を決め、ライトアップのお手伝いをしています。日本の桜はちょっとずつ色味が違います。ちょっと濃いピンクもあれば、薄くほとんど白のような、またその中間みたいなものがあります。桜の花のライトアップはこうしたデリケートな花の色を見ることが大事な仕事になっています。

奈良の平城京址1400年イベントでは奈良時代の建物が復元されました。しかし夜間のライトアップはしないというのです。私は「それはないでしょう。昼間は近くに工場などがあって奈良時代の雰囲気がない。夜になったらタイムスリップできるようにしましょう」と知事さんや文化庁にお願いに行き、ライトアップが実現しました。

東京タワーが50周年を迎え、もう1種類のライトアップを依頼されました。東京タワーの照明について様々な表現がありますが、私の一番のお気に入りには「裳裾（もすそ）を広げた貴婦人のよう」です。貴婦人の50歳の誕生日ならやっぱりダイヤモンド、ダイヤモンドを差し上げましょうということで、ダイヤモンドの衣をもう1枚デザインしました。7色入っていてブルーから変化していった最後は赤になります。サッカーW杯でニッポン頑張れという時にはブルー、なでしこジャパンの準優勝でもブルー、米国オバマ大統領の来日時には米国国旗の赤と白、青で彩りました。こちらでも年間デザインメンテナンス契約をしており、毎年11月に来年のプログラムを作り、運用させていただいております。

これは東京・丸の内でも5年間ほど行いました光都東京LIGHTOPIA（ライトピア）という冬のイベントです。皇居の堀のライトアップなんて前代

未聞のことでした。すべてLEDでしかも太陽光発電の電池を使って照明しています。

## パリやベルリンでも交流イベント彩る

海外の例も紹介しましょう。大都市スケールのイベントを何回もやっています。日本とフランスの交流150年ではセーヌ川に架かる25橋をライトアップし、ノートルダム寺院のある島の岸壁に日本の絵画を光で描きました。これは狩野芳崖の描くトラが泉の水を飲みに来ている絵です。イタリア・ローマでは川の中州の島に架かる橋3橋を日の丸のイメージ、白と赤で染めました。

ハンガリーの首都ブダペストでは日本とハンガリーの国交再開50周年事業でエリザベト橋を両国国旗の色でライトアップしました。ちなみにブダペストは照明の先進地であり、1920年代には電球の生産量が欧州一、照明関係の歴史的な技術家たちを数多く輩出しています。素晴らしいライトアップが施されていて、昼間の景色と夜の景色を合わせてユネスコの文化遺産に登録されています。エリザベト橋だけが暗かったものですから、照明を希望して実現しました。日独交流150周年の記念イベントでは、ドイツ・ベルリンの東西を分ける壁で知られ、その後自由や平和の象徴となったブランデンブルグ門の壁にオリンピックに参加している200余の国と地域の平和を意味する文字を光で描きました。これら海外イベントのほとんどは同じく照明デザイナーとしてパリを拠点に活動している娘の石井リーサ明理とコラボレーションしてやっております。

## 多くの光を宝石状にちりばめ ジュエルミネーション

2011年3月の東日本大震災の直後、東京も真っ暗になりました。1カ月後ぐらいに「皆を元気づけたい。また頑張りましょう」ということで東京タワーに光文字を描かせていただきました。電源はもちろん太陽光発電。タワー足元のクレープ屋さんの客待ちテントの上に張ったパネルで作りました。このぐらいの文字を描く程度の電気は太陽光発電で十分に確保できます。

ご覧になった方がいらっしゃるかもしれませんが、東京・稲城市にある遊園地「よみうりランド」のジュエルミネーションです。5年前に社長さんが一人でお見えになって「光でよみうりランドを復権できないか」と相談を受けました。ここは非常に眺望のいいところで観覧車から東京タワーやベイブリッジが見えます。思いついたのが宝石箱

の中に入って見る夢のような景色です。名付けてジュエルミネーション。ジュエリーにイルミネーションを足した合成語で、冬のイベントとして始まりました。宝石の光を集め、当初の30万球から50万、100万と増えて今年は2月15日に閉園しましたが、300万球に達しました。たくさんの光が宝石のようにちりばめられています。夏の間以外は使われていないプールサイドにイルミネーションを付けますと、水面に映ってきれいですし、噴水を加えるとまるで別世界のようになります。人気スポットはラプリージュエリーというピンク系の宝石の色をちりばめたゾーンです。今冬は42万人が来園しました。もともと冬の遊園地は閑散としているわけですから、施設側の収益は推して知るべしというところですよ。来園者は若いカップル、家族連れ、女子会が多く、中でも女子会はリピーターが多いという現象を呼んでいます。

### LEDの進歩や太陽光発電で安価な電気代

照明デザイン、照明ってすごくお金が掛かると思いませんか。この新しい歌舞伎座はすべてLEDでライトアップしました。屋根瓦は超高層ビルに設置した照明器具から照らし、光が道路に漏れないように設計してあります。また白い色にこだわって365種類の白がちょっとずつ違って演出されています。こうした照明を全点灯した時の電気代ってどのくらいだと思いますか。なんと1時間150円ですよ。LEDの発明が貢献してくれました。先ほどのよみうりランドの1時間の電気代は約3000円です。来園者は自宅の電気を消し、暖房も切って出掛けますから、トータルに見たらすごい省エネじゃないかと思えます。

一昨年、東京お台場の先にできました東京ゲートブリッジはその年の世界で最高に美しい照明の施設例として北米の照明学会から最優秀賞をいただきました。トラスをいかに美しく見せるかということに挑戦しています。実はこの辺りは2020年の東京五輪のいろんな会場になりますので、五輪の色で染まるようなプログラムを既に用意してあります。特筆すべきは、晴海に入る大型客船のため下部の桁が高く、上部は羽田空港に近いので低く抑えてあるので夏場でも相当に日差しが入ることに着目した太陽光発電です。国交省や東京都にお願いして実現したのですが、ライトアップの約半分の電気がこれで賄われています。

直近の活動例では創エネ・あかりパーク。上野公園全域を使ってエネルギーを作り、そのエネルギーで何かを灯しましょうという趣旨です。昨年9月には日本スイス交流150周年で首都ベルンの

国会議事堂前の広場で葛飾北斎の浮世絵をプロジェクションしました。また北極から見た日本とスイス、ゆっくりと回る地球を投影し、中に人が入ると時計の文字盤が現れ、時間と共に歩くというインタラクティブな仕掛けも行いました。インタラクティブなイベントは今、世界的な流行でして、見に来た人たちの参加性が注目されています。それを先取りしたインタラクティブ・ライトアップ・パフォーマンスとしてベルン市民のほぼ3人に1人が見に来ていただきました。このように光を使いながらいろんな発信をしていきたいと思っています。

### 歴史的建造物がなくても都市景観照明はできる 富士山を持つ富士市のポテンシャルは高い

きょうは富士市に伺い、昼間の大変美しい晴れた日に富士山を仰ぎながら様々な場所を見てまいりました。実にいろんなものがあるまちだなと思いました。都市景観照明といいますと、古くからの立派な神社仏閣や歴史的な有名な建造物がないとできないとおもいますが、そうではありません。光でいかにその場所の個性と魅力を抽出するか、他にないことができるかということなのです。拝見させていただいて、このまちには大きなポテンシャルがあると思いました。皆さんは持ちすぎでいらっしゃる。素晴らしい富士山の景観、東京や名古屋から1時間という足場の良さ、そして海あり山あり、美味しいものがあります。ここで暮らしている方はこうした優位性に気付かれていないのかもしれませんが。非常にポテンシャルの高い、素晴らしい場所だとお見受けいたしました。

### <プロフィール>

■いしい・もとこ 氏 東京芸術大学美術学部卒業。  
フィンランド、ドイツの照明設計事務所勤務後、石井幹子デザイン事務所設立。都市照明から建築照明、ライトパフォーマンスまで幅広い光の領域を開拓する。日本が誇る世界的な照明デザイナー。主な作品は東京タワー、レインボーブリッジ、東京ゲートブリッジ、函館市や倉敷市の景観照明、白川郷合掌集落、創エネ・あかりパーク、歌舞伎座ほか。海外では〈日仏交流150周年記念プロジェクト〉パリ・ラ・セーヌ、ブダペスト・エリザベート橋ライトアップ、〈日独交流150周年記念イベント〉ベルリン・平和の光のメッセージほか。国内外での受賞多数。

## パネル 討論

# 「夜景による地域創生」



### 〈パネリスト〉

石井 幹子氏(照明デザイナー)  
小長井義正氏(富士市長)  
花井 孝氏(静岡県地域づくりアドバイザー)  
鷺見 隆秀氏(富士工場夜景倶楽部会長)

### 〈コーディネーター〉

大石 人士氏(一般財団法人 静岡経済研究所常務理事 元サンフロント21懇話会TESS研究員)

◆大石 光をテーマにした理由には2015年が国際光(ひかり)年であり、昨年からいろいろいわれている地方創生つまり地方に光を当てていくことの重要性、さらには富士の工場夜景が非常に注目されているということがあります。まず富士の工場夜景を映像で見たいと思います。富士工場夜景倶楽部の鷺見さんお願いします。

### 相次ぐ企業の縮小や閉鎖 夜景で活気 市民が産業のまちに自信と誇りを持つ

◆鷺見 それでは「富士市の工場夜景発信 経緯と可能性」ということで紹介させていただきます。きっかけは子供のころから工場の明かり、配管のごちゃごちゃした感じが宇宙的で大好きでした。8、9年前でしょうか工場だけの写真集が出て、私も刺激されて撮ってみたところ予想以上の出来栄えに味をしめ、のめり込んでいったところです。夜中の12時とかに工場の前に一人で陣取って写真を撮り始め、フェイスブックの自分のページに掲載しました。思いのほか反応がよく、これだったらマニアックかもしれないが、工場夜

景ファンや写真マニアを富士市に呼べるのではないかと考えました。市内の旅館やホテルも平日はいいのですが、観光地ではありませんので週末が振るわない。夜景で宿泊客が増えればいいなという思いもありました。

SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)でつながったメンバーに声を掛け、富士工場夜景倶楽部を作らせていただきました。市内では大手企業の縮小とか閉鎖が聞かれた時でもあり、紙のまちをちょっと斜めの角度からにはなりますが、夜景を通しての企業PR、イメージアップにもつながるだろうと始めました。

昨年11月の「広報ふじ」に載った原田駅の工場夜景を皮切りにメンバーの作品を紹介します。造形美は工場の力強さを示してくれます。大興製紙やポリプラ、日本製紙の富士と吉原の工場、春日製紙工業などなど。松の木越しの富士山と工場など、バックに富士山が入り込むのが富士市の工場夜景の特徴です。大きなコンビナートとは違って、工場地帯ではあるけれど自然がたくさん残っています。自然との共生、四季の見える工場夜景ということができます。

平成25年6月、富士山が世界文化遺産になりました。富士市には構成資産がないけれど、富士山の恩恵である豊富な湧水に支えられて製紙が基幹産業となり繁栄してきました。へ理屈かもしれませんが、これこそ富士山と富士市の文化ですから、写真で自信を持って発信すればいいと思っています。

商工会議所青年部もバックアップしてくれるようになりました。シティプロモーションとしての活用策を探るため、工場夜景の先進地・四日市市を訪ねました。両市には共通するものがあります。人口規模は富士26万、四日市31万人、富士はヘドロ、四日市はぜんそくで教科書に載るほど公害問題で有名になってしまった。産業が栄えていた時代はよかったけれど、今は企業の縮小や撤退で元気がなくなっている。共に観光客は少なく、四日市は伊勢神宮へ、富士は西から来る人は伊豆へと通過都市です。

四日市が工場夜景にスポットを当てた背景は「ぜんそくのまち」と卑屈にならないで誇りが持てるようにするためでした。でも現実には厳しく、船を出してのツアー「ホテルとコンビナート鑑賞会」を開いたら、「公害を過去のものにしてきれいごとをいっているのか」と猛反発を受けたそうです。でもめげずに辛抱強く、理解をしていただきながら取り組んでいます。

当時、全国5大工場夜景都市がありました。北海道・室蘭、神奈川県川崎、四日市市に北九州市と山口県周南市です。その中に富士市も加えてもらえるよう四日市に頼み込んで第4回のサミットにオブザーバーとして参加させていただきました。そんなタイミングで小長井市長が昨年1月に就任され、商工会議所青年部は富士市の観光産業の活路を考えるとというようなタイトルで2月公開例会を行いました。中心に据えたのは工場夜景、岳南電車の利用法、インバウンド誘致の3本でした。小長井市長には工場夜景を推進するといっていたので、翌月には早速モニターツアーを実施し、6月の全国広報広聴大会では夜景ツアー、富士山の世界文化遺産1周年の時は岳南電車を貸し切り、岳鉄と日本製紙の協力も得てライトアップも仕込んで「富士山工場夜景ピールトレイン」を運行しました。商工会議所の方でも大掛かりなモニターツアーをしていただきました。徐々にですが、富士市は工場夜景を推進していることが市民にも根付きはじめ、モニターツアーは八王子や横

浜など首都圏からの参加が増えてきました。現在、全国工場夜景都市は昨年、兵庫県尼崎市が入り、6都市となっています。富士市の仲間入りが内定し、平成28年度、市制50周年の時に7番目として加わることが確定しています。

マニアックな工場夜景かもしれませんが、産業とそこで働く人たちに光を当て、市民が工場や煙突が邪魔というのではなく、産業のまちに自信と誇りを持っていただくことが大事だと思っています。例えば実際に稼働している工場の煙突をライトアップすれば、走行する新幹線の左右で見ることができます。勝手にフジヤマファンタジーナイトと名付けていますが、ちょっとおしゃれなこともやってみたいですね。

◆大石 光というキーワードは産業観光や交流人口の拡大などに関連しています。小長井市長にお伺いします。これから産業観光、光というテーマをどのように扱っていきますか。

### 市制50周年に全国工場夜景サミット 行政は後押し・支援、可能性を期待

◆小長井 私が申し上げるまでもなく富士市が観光に注力し始めたのはつい最近のことです。工業都市として発展し県内製造品出荷額1、2位を浜松市と争ってきました。それが今は浜松、静岡、



小長井義正氏

磐田、湖西に次ぐ5位です。観光に光を当て産業として育てていこうと10年前に観光交流まちづくり計画を策定し5年、5年で今2回目の最終年度、新たな計画を策定中です。

先ほど驚見さんがおっしゃった就任早々の商工会議所青年部の公開例会では大きな気付きがありました。それは新しいものをどこかから持ってきて観光の目玉にする気は全くない、既に富士市にあるものを掘り起こし光を当てて磨き上げ、発信していくことでした。私自身、工場夜景が観光資源になるとは思ってもいなかったし、東京での学生時代にはある意味でのマイナスイメージを抱い

ていました。工場と観光を結びつけるものといえば、製造ラインを見てもらおう工場見学を想起していました。市内では牛乳パックの再生紙化の過程を見学できる工場もあるなど一定の工場見学は行われていますが、産業観光にまで発展して来ませんでした。唯一成功例を挙げればスポーツ観光でしょう。ホテル旅館業組合がビジネス客の減少傾向に対応するためスポーツ大会の誘致に乗り出しました。サッカーやソフトボール、野球、そしてマイナーな競技ではありますが、フライングディスクのアルティメットは全国大会をこの富士市で開催しています。

工場夜景に話を戻しますと、富士市は平成28年に市制施行50周年の節目を迎えます。工場夜景サミットを開催し、全国に発信していくことは大きな意味があります。しかも鷲見さんや商工会議所青年部などが率先して取り組んできたものであり、行政が後押しや支援の役割を担うことで可能性が広がるのではないかと期待しているところです。

◆大石 光だけでそう簡単に地域活性化はできないというご意見もあるでしょう。岐阜県美濃市の「和紙あかりアート展」を成功に導いた仕掛け人、花井さんに来ていただいておりますので、和紙とあかりを結びつけた美濃市の試みのポイントをお聞かせください。

### 地域資源の和紙であかりの魅力発信 中高校生参加イベントから伝統に

◆花井 工場夜景と和紙あかりアートには基本的な違いが一つあります。工場夜景は皆さんが努力して作ったものじゃなくて工場が生産の必然性のために作ったものです。たまたまそれが美しかったから資源にして儲けようとするのですから、半端な知恵ではそう簡単には儲かりません。マニアとか物好きのレベルならいいけれどビジネスになるかという点で簡単ではないと思います。

あかりと光はちょっと違います。私が目指してきたのはあかりです。なぜ美濃市であかりアートかという点で、必然性があるからです。美濃市は1300年の和紙の伝統があります。しかも現在では和紙の一大生産地です。江戸時代はこの富士市が一大生産地だったそうです。残念ながら美濃市は山に囲まれて立地が悪く、新しい産業に乗り換えられなかった。そこにいくと富士市は太平洋メ

ガロポリス、首都圏に近かったのでいち早く近代製紙業に転換できたわけですね。ところが美濃市はほとんど転換できず、マニファクチャーでひっそりと和紙をすいてきた。まちも家並も。私の今使っている携帯電話はガラケーですが、美濃市もそんなまちでした。でも観光客ゼロのまちに今年年間80万から90万人が訪れるようになっています。

経営的、運営的に行き詰まったまちはだいたい観光都市を標榜します。なぜか、観光は誰も傷つかないし、失敗と成功例があまり出てこないから。ですから観光を重点施策に掲げる地方自治体は全国の約86%にも及んでいます。よく交流人口という言葉が出てきますが、観光客も含めて交流人口1人は定住人口4人分の経済効果があるとされています。先ほどの石井先生のお話の中にも宿泊客1人は11倍の経済波及効果があるということが出てきました。従って小長井市長がこれから観光政策に力を入れるぞとおっしゃるのは間違いではないと思います。

地域資源を生かすということもよく使われます。資源とは辞書を引くと生産の元になる物質と出てきますが、物質だけではなく人も伝統も、工場夜景も資源です。それらを資源たらしめるかどうかは知恵です。どういう切り口でどういう提案の仕方をしていくか、そこがこれからのカギになります。

美濃市に話を戻しますと、物まねではなくその地域でなければならぬ必然性があったこと、和紙にテーマを絞ったこと、そして和紙を通じたあかりの魅力です。和紙を通じたあかりにはゆらゆらとした「揺らぎ」があって、見る人を癒し、心を落ち着かせてくれます。

◆大石 美濃市の場合は単なるイベントで終わらなかった。ソフトからハードまでまちづくりにつながり、まちおこしになっているのが特徴のようですが。

◆花井 美濃市で試みたのはオール市民参加です。イベントに中学生、高校生もボランティアとして参加してもらった。夜9時までやるものだから教育関係者を説得するのが大変でしたが、ガイドや受付のほかアンケート担当者、親切係、ごみの回収などとほとんどの中高校生が関わってくれました。和紙の活用も工夫しました。和紙の消費量を増やすには立体造形に、行燈にはアート性、クリエイティブ性を持たせて作品化を図りました。それから22年も続けて来ると、ボランティアで頑張っ

てくれた子供たちは母親、父親になっています。始めたころに生まれた子供も成人の仲間入りをしています。自分たちの行事に発展し、イベントが伝統行事になった。結構エネルギーのいることですが、もうやめられない。伝統に変化したから続いてきたと思います。

かつては観光客ゼロのまちに10万人単位の人が訪れると何が起きると思いますか。国道から県道から不法駐車であふれます。市内の飲食店、コンビニから食料品が消えます。沿道の商店や民家のトイレがあふれます。当時は水洗ではなく汲み取りでしたから、トイレを貸してほしいと頼まれるのはいいんですが、ものの1時間であふれてしまいパニックになりました。そこで市は共同溝を計画しましたが、人口2万6千の小さなまちですから予算がありません。市長が一点豪華主義で共同溝に予算を集中し、下水道、上水道、それに電線地中化まで一挙にやっしまいました。そうしたら文化庁が伝統的建造物群保存地域に指定してくれました。上限600万円までは国の補助金で修理ができるまち並みになりました。次に全国各地で空き店舗問題が深刻化していく中で、美濃市はこの20年の間に新規開業20店舗、改装8店舗、入居希望50件と、分母は小さいけれど空き店舗のない商店街になっています。観光地化したということですが。

世間的にも評価され、総務大臣表彰、国交大臣表彰、そして宝石のティファニーからの日本文化賞などをいただきました。第三者の評価は行政への応援歌となり、合意形成が進めやすくなります。たかがイベント、されどイベントがまちの姿まで変えたのです。

◆大石 オール市民の意識と長く続けることの重要性がよく分かりました。工場夜景の活動についても同じようなことがいえるのではないのでしょうか。

### 現状の富士市大好きな仲間増やす 「富士山と一」運動で魅力を発信

◆鷺見 他都市に比べ取り組んできた期間が短く、民間先導でした。新聞やテレビなどメディアに取り上げられてある程度は分かってきた方がいる半面、まだまだの方もいらっしゃる。被写体となる企業の協力とか理解が今後さらに必要になるでしょう。応援してくれる企業ばかりじゃないと

いうのも現実です。内部を見せてくれる、開放してくれる企業は、地元で仕事をさせていただいている以上、地域貢献できるところはしていこうという考え方をしてくださっています。産業のまちである現状の富士市を好きになることが肝心で、市民全員が富士市大好きとなるための雰囲気作りが必要だと思っています。

100年、200年先には煙突って何ですかという時代が来るでしょう。そういうことはプロに考えてもらおうとして、一市民としては今元気が感じられない富士市をちょっとでも元気にしたい、また世界遺産富士山に対して工場が抱える公害の問題や景観の悪さなどマイナスのイメージを少しでも払拭したいと考えています。これができれば他にも色んなことができるだろうし、富士市を何とかしよう、元気づけようという団体・グループへのエールにもなります。

工場夜景で市が潤うなんてあり得ません。「あっ富士市にはそんな一面もあるんだな」ということを知っていただき、光の当て先を工場夜景だけではなくいろんなところに変えながら、富士市を盛り上げていきたい。だんだんと富士市って動いている、変わっていくという雰囲気が工場夜景をきっかけに広がっていけばいいなと思って取り組んでいる最中です。

◆大石 やはり工場夜景を見るだけではなく、岳南鉄道があったり、富士山がよく見えたり、港があったりという富士市のポテンシャルと結び付けていくことが重要になります。

◆鷺見 地域で頑張っている方、行政、あるいは企業など、工場夜景とは全く関係のないところでも共にコラボレーションしながらやっていき、発展させていく。いろんな方向にチャンネルが動



鷺見 隆秀氏

けばいいと思っています。

◆大石 連携したり、調整したりしながら作り上げていくとなると、シティプロモーションが必要です。富士市の方でもかなり考えているようですが。

◆小長井 昨年4月に観光課の中にシティプロモーション推進室を作り、富士市の魅力をいかに発信していくかということを調査してきました。富士市と富士山は外せないけれど、ほかにも魅力が数多くあります。そこで「富士山と何々」という形で新たな魅力を付加する「富士山とー」運動を展開しています。市民と共に作ることを大前提にさまざまなご意見ご提案をいただき、小中学生を中心にポスターを作ってもらいました。最終的には11に絞り込みました。その中には工場夜景をはじめ、岳南電車、田子の浦港、シラスなどが入っています。富士山と工場夜景についていえば、富士山も映し出される他に例を見ない工場夜景であり、富士市ならではの魅力だと思います。

◆大石 石井先生は先ほどの基調講演で富士市にはポテンシャルがあると述べています。富士市の可能性についてもう少しお話をいただけますか。

### 様々な分野を串刺しにする光 ライトミュージアムはいかが

◆石井 皆さんのお話を聞きながらどこかに参考になる事例がないかと考えていました。一つありました。ドイツ西部のウンナという小さなまちですが、炭鉱があり産業革命以来、工場地帯になっ



石井 幹子氏

ているところです。ここでは炭鉱の跡地に小規模ですがライトミュージアムを設けています。たいしたコレクションがあるわけではなく、光を使うアーティストを呼んで作品を作らせて展示しているというようなものです。特筆すべきはフォーラムです。欧州はもちろん、米国やアジアからも専門家らを呼んで光について討議します。私もアジアで呼ばれましたが、そこに結構、光や照明デザイナーの関係者が集まり、デザイナーを目指す学生たちもやってきます。マーケットが広がっていることもあるでしょう。照明関係者の間で有名なまちになり、情報が行き交う照明関係者の楔みたいな役割を果たしています。人口は3万ぐらいでし

ょうか、美濃市ぐらいの規模です。

富士市には工場夜景をフォーカスしたいと熱心に活動している地元の人たちがいて大変心強いのですが、花井先生がおっしゃったように工場夜景だけで人が呼べるかということそう簡単ではないと思います。ただし例えば撤退しますという工場や古民家を市が買い取って光に特化したミュージアムを造ります。新しい建物より古いものの方がいいですし、コレクションも必要ありません。要は人材、数人の核になる人がいればいいんです。東京の森ミュージアムはコレクションを持たずに全部借りてきています。入場者さえ集まれば借りて来ても十分ペイします。あるいはアーティストに来てもらって作ってもらうのもいいでしょう。作家が光について語る場が設けられたら照明関係者は聞きたいと思うでしょう。また身体で表現するコンテンポラリーダンスと光のデザイナーが組んでパフォーマンスをすれば見に来たい人が大勢いるでしょうし、やってみたい方も多いと思います。光と関連付ければキャンドル作りやスタンドグラス作りなども有望です。

今年は国際光年でして1月にパリのユネスコ本部でオープニングがありました。天文学者や物理学者をはじめ学術関係者、そして産業や情報、医療、都市、建築、アート関連など多彩な顔ぶれでした。このごろは光が様々な分野を串刺しにする役割、切り口となっています。まだまだ日本ではあまり活発ではないのが残念ですが、私がプロデュースしている創エネ・あかりパーク（10月）では国際光年にちなんで何か新しく加えようと思っています。

光に特化したもので何かがあると思います。富士市にライトミュージアムを造る。市長さんの「富士山とー」運動になぞらえて私は「富士山と光」を提案したいと思います。いかがでしょうか。

◆大石 夢のある提案をありがとうございます。地域おこしの取り組みでは最終的に地域に残るのは何かという点が結構気になります。花井さん、美濃市の場合はいかがでしたか。

### 存在感が大事、市名は最大の宝 新たな動き、今後の発展に期待

◆花井 存在感です。美濃市は皆に知られたまちになりました。私の持論ですが、人々は存在を知らないまちに来るわけがないし、存在を知らない



花井 孝氏

店で買い物を  
しません。驚  
見さんは工場  
夜景は手段の  
一つであり、  
ここから情報  
発信をして富  
士市の存在感  
を構築してい  
くんだと話さ  
れていたので

安心しています。

富士市にとって最大の宝が一つあります。よだれが出るぐらいの宝、それは富士市という自治体の名称です。商標権にしたら数百億円の値打ちがあるでしょう。この宝をどう活用できるかは富士市民である皆さんの知恵と工夫だと思います。それからよく負の遺産といわれる煙突ですが、負の遺産だけれど遺産には違いないのだから活用しましょう。20数年前、富士市には365本の煙突があり、全国で最も煙突の多いまちといわれました。そこで煙突のペインティングとして、ピアノの鍵盤、ネクタイの柄など色々ありました。先ほどの驚見さんの提案に煙突のライトアップがありました。自らの工夫でライトアップするわけだから工場夜景とは異なるアート作品だと思います。全ての煙突がライトアップされて富士山を背景に光り輝いていたら、きっと存在感のある富士市が出現することでしょう。いずれにしても何かをやらなきゃ変化はしません。議論している間は変化がありませんから、いつ富士市がアクションに結び付けていくか、見させていただきたいと思います。

◆大石 富士市という自治体名は宝であり、存在感を構築することの重要性が指摘されました。驚見さん、存在感を出していくために不可欠な今後の展開についてお聞かせください。

◆驚見 比較的短期間の取り組みではありますが、民間から始まり、青年団体に行政といろんなところが協働してやっています。今後これをさらに広げ、協議会みたいな形で事務局的なものを作り、民間企業や宿泊、飲食、まちづくり団体などを取りまとめていける組織ができたらいいなと思っています。今はウェブ上での発信が効果的ですので、工場夜景の写真を撮らせていただいている企業のホームページをリンクしたり、環境問題についての企業の取り組みを紹介したりするなど連携も取

りやすいでしょう。私たち富士工場夜景倶楽部はごく普通の市民が工場夜景に絞って頑張ってきたわけですが、徐々にフォロワーや応援者が増え、私たちが色んなことを広く深く知ることができています。皆さんの協力が得られる環境が少しずつですが整ってきましたので、さらにいろんな方向に発展できればと考えているところです。

◆大石 小長井市長に再びお伺いします。工場夜景を含め、新しいまちづくりの方向性をどのように考えていますか。

◆小長井 工場夜景倶楽部のメンバーを見ていると若い方が多く、こういうグループが自主的に活動して富士市の観光とかまちづくりに直接関わってくる時代はあまりなかったように思います。我々にとっても心強くありがたいことです。皆さんの主体的な活動を「富士山と一」運動の中においても成果を上げていってくれるような取り組みに育てていきたいと思っています。既に動き出しているわけですから、いかに市民全体に広げていくのか、そして最終的に市民が愛着を持ち、生産活動をしている工場やそれによって富士市が成り立ってきたこれまでの歴史に誇りを持ってもらえるか、そこにいかに結び付けていくかではないでしょうか。

### 工場夜景は原始的な照明デザイン 未来開くやさしい夜景が研究課題

◆大石 石井先生がどこかに書いていたと思いま



大石 人士氏

すが、光とエネルギー、環境はかなり近い関係にあります。これからの社会で重要なキーワードになっていくとみてもいいのでしょうか。富士市の

場合、熱電供給事業が始まるなどエネルギーのまち、環境のまちという光に合わせた動きがあります。

◆石井 今のところ光を人工で作るには電気エネルギーを使わないとできません。ローソクとかランプもありますがこれは市民の世界であって、電

気エネルギーが今の手段です。ことに化石燃料を用いる火力発電のエネルギーは大事に使うことが必要です。その意味合いでいうと、工場夜景はあれだけ光をばらまいているわけですから実はあまり省エネ的な使い方ではありません。本来はメンテ用のためです。だとすればメンテをするに足る光量とその照明手法があるはずです。照明デザインとしては極めて原始的であり、環境を重視する方からは「問題あり」という説が出ています。工場夜景を見て直感的に「好き、嫌い」「きれい、きれいじゃない」とかいうのではなく、本質的なところに両面があることをちょっと考えておいた方がいいと思います。私はもう少し環境を考えた工場夜景で、なおかつきれいな工場夜景がきつとあるだろうし、次なる研究課題ではないかととらえています。ここでエネルギーを作り出すのであれば、環境にやさしく、人にやさしく、そして富士市としての存在感を持って発信していく。それも世界の富士市を目標に展開されていったら、素晴らしい未来が開けるのではないかと思います。

◆大石 全国で7番目の工場夜景都市、そしてサミットの開催が決まったようですが、富士市には6番目までとは違う形での工場夜景を作っていたらいいと思います。これまで環境やエネルギーのことで非常に苦労され、一生懸命に取り組んで来られた経過があるわけですから、富士市ならではの工場夜景なりライティングを実現していく一歩を踏み出したのではないのでしょうか。やっぱり富士市ってすごいな、というものにしていただきたいと思います。

## 〈プロフィール〉

### ◇パネリスト

■石井 幹子 氏(いしい・もとこ) 照明デザイナー

■小長井義正 氏(こながいきよしまさ) 富士市長  
富士市出身。一橋大学商学部卒業後、9年半の総合商社ニチメン(現双日)勤務を経て、1988年家業の小長井米店従事。97年12月から富士市議を5期(15年半)務め、2014年1月富士市長に就任した。富士市議時代に議長、富士市監査委員、静岡県市議会議長会会長などを歴任した。趣味はジョギング、バンド演奏(ギター)。1955年生まれ。

■花井 孝 氏(はない・たかし) 静岡県地域づくりアドバイザー

静岡市出身。国際A級レーシングドライバーとして活動後、県商店街連盟青年部長、清水みなと祭り実行委員長などを歴任。地域に人の集まる仕掛けづくり(観光・集客計画)などの実践に関わる。昨年20回目を迎えた岐阜県美濃市の「美濃和紙あかりアート展」を企画、プロデュース。同展は総務大臣表彰を受け、ティファニー日本文化賞なども受賞した。1944年生まれ。

■鷺見 隆秀 氏(わしみ・たかひで) 富士工場夜景倶楽部会長

富士市出身。旅行業のエクセルツアーズ専務取締役。富士市内を走る岳南電車(鉄道)の魅力を発信する「岳南鉄道サポーターズクラブ」の会長。また岳鉄沿線の小さな飲食店を食べ歩き、その情報を発信している「水曜探検隊」の隊長を務めるなど、意欲的に地域おこしに取り組んでいる。富士商工会議所青年部の地域活性化委員会委員長。1968年生まれ。

### ◇コーディネーター

■大石 人士 氏(おおishi・ひとし) 一般財団法人静岡経済研究所常務理事

藤枝市出身。静岡銀行入行後、1982年静岡経済研究所出向。2005年より研究部長、12年理事。専門分野は地域経済、企業経営、まちづくり、商店街活性化、行政改革など。静岡県社会資本整備重点計画・推進会議委員など県をはじめ、島田市、藤枝市、三島市などの委員や静岡英和学院大学短期大学部の非常勤講師などを務める。1956年生まれ。

## サンフロント21懇話会の会員情報

### ■会員の変更

#### ◇日本通運(株)静岡警送支店

支店長 清水 郁英 → 支店長 渡邊 浩志

#### ◇木村美都子税理士事務所

税理士 木村美都子 → 税理士 木村 昌宏

#### ◇(株)大丸松坂屋百貨店 松坂屋静岡店

店長 丹羽 亨 → 店長 小山 真人

#### ◇米久ベンディング(株)

専務取締役 佐藤 貢一 → 取締役営業統括本部長 井畑 昭彦